

※ 毎月23日は「福岡市 子どもと本の日」です ※
～ 子どもの読書活動を推進しましょう ～

小学生読書リーダー養成講座 司書教諭説明会

今年の小学生読書リーダー養成講座※は、6月15日、22日、7月6日の土曜日に3日間開催されます。そこで、この養成講座の実施のために参加校の司書教諭に説明を行いました。

はじめに、学校図書館支援センターから事業内容や昨年度実施した講座の様子、今年の実施要領について説明がありました。

次に、学校指導課から小学生読書リーダー養成講座が子どもの読書活動推進に位置付けられていることや読書リーダーの活動と効果の説明、読書リーダーのアンケート結果報告がありました。アンケートでは、①「読書リーダーが学校でなんらかの活動を行った」70%、「行っていない」30% ②活動を行った内容は、「ポップ作り」43%、「読み聞かせ」31%、「環境づくり」20%、「ブックトーク」6%でした。参加した先生方は、熱心に説明に耳を傾けていました。また、養成講座に参加した子どもたちは、講座で学んだことを学校で活用できてうれしいだろうと思いました。



(司書教諭説明会の様子)



(学校図書館支援センターの説明)



(学校指導課の説明)

今年の小学生読書リーダー養成講座の申し込みは、66校で231名です。養成講座の様子は、次号でお知らせします。

※小学生読書リーダー養成講座とは、毎年実施されている1日講座です。この講座を受講した小学生は、読書リーダーとして、学校で読書の楽しさや面白さを伝えたり、下級生に小学生読書リーダーの大切さを教えたりする大事な役目があります。

Hello! 学校図書館

《西戸崎小学校》



西戸崎小学校は、16学級405名の学校です。子どもたちが図書館で本を読むだけでなく、いろいろな本に関心を持ってもらうために話題になったことに関する本を展示しており、図書館の情報センターとしての機能も果たしている素晴らしい図書館です。

○ 令和時代に関する展示

元号が平成から令和になったため、図書館入口に置いてある丸テーブルの上に、元号や令和につながる本、また子どもたちにも読みやすい万葉集関係の本などを展示しています。



(展示された令和や元号に関する本)



(「万葉集のミニ知識」と表示して「日本のもと」を展示)



(「古事記 日本の成り立ち」と表示して「古事記」を展示)



(「梅花の宴・・・」と表示して「福岡の子ども文学風土記」の該当ページを開いて展示)



(「時代別日本の歴史」の本で該当するページを開いて展示)



(本を展示していたが「令和は、249番目の元号」と表示だけが残った)

○ はやぶさ2号に関する展示

はやぶさ2号や宇宙に関しての本を展示して、宇宙や天体への関心につながるようになっています。



(「はやぶさ2号 新しいミッション」と表示して、「はやぶさ宇宙の旅」「宇宙がきみを待っている」などを配架)

○ イチロー選手の大リーグ引退に関する展示

図書館カウンターそばの面出し書架に、イチロー選手に関する本や野球を通して子どもたちに元気を与えるような本を展示しています。



(「イチローへの手紙」「野球の神様がほくに勇気をくれた365日の言葉」などの表紙を見せて配架)

7月生まれの文学者



山中 恒（やまなか ひさし）と「オニの子・ブン」

1931年7月20日 北海道小樽市生まれ

7人兄弟の長男であった山中氏は、母の体が弱く寝ていることが多かったので、自然と小学校1年頃からご飯のしたくや買い物などをしていました。8歳の時、父の仕事の関係で神奈川県平塚市に転居しましたが、戦争中縁故疎開で再び小樽に戻りました。

旧制中学卒業後、早稲田大学第二文学部演劇科に進学し、早大童話会に所属しました。

大学卒業後は、百貨店宣伝部に勤めながら児童文学の創作を始め、1956年「赤毛のポチ」で日本児童文学者協会新人賞を受賞し、児童文学作家としてデビューしました。

「オニの子・ブン」は、山中氏の創作姿勢が変わる転機となった作品です。この作品の発想は、早大生だった頃、金子満晴の詩集「鬼の子の唄」を読んだときの感動をもとにした創作メモです。このメモをもとに最初原稿80枚の作品を書き、その後、低学年の子どもを対象にして120枚に書き足し1962年に出版されました。

山中氏が子ども向けの物語を執筆するときは、子どもたちが面白がって読んでもらえたらと思い、いつも子どもと遊んでいるみたいな気持ちで書いているそうです。

作品は、「とんでろじいちゃん」（野間児童文芸賞）「三人泣きばやし」（産経児童出版文化賞）「天文子守歌」などあります。



池澤 夏樹（いけざわ なつき）と「静かな大地」

1945年7月7日 北海道帯広市生まれ

小説家の福永武彦の長男として帯広で生まれ育った池澤氏は、幼少のころから一族の開拓時代の物語を聞いて育ち、いつかそのことを小説にしようと思い決めていたそうです。

1964年埼玉大学理工学部物理学科に進学しましたが、中退してギリシア詩・現代アメリカ文学を翻訳する一方で詩作をはじめました。

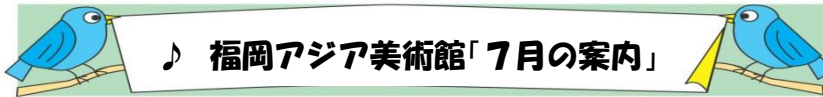
池澤氏は、27歳の時にミクロネシア行き、知らない新しい土地との出会いの喜びが表現意欲の源であることに気が付いたそうです。その後、太平洋諸島やインドの旅をつづけ、3年間住んだギリシアから帰国後、小説を書いてもいいかなと思うようになり、1988年「スティル・ライフ」で芥川賞を受賞しました。

受賞後も世界各地を旅し、1993年から沖縄、2005年からフランス、2009年に帰国後は北海道の札幌に住み、作品を発表しました。

「静かな大地」は、池澤氏の6歳までの思い出がだんだん薄れ、その頃を知っている身内が老いてゆくと、やがて話をきけなくなってくると思い、北海道新聞の十勝版だけに載せてもらうことを条件にして書いた、自分の幼少時の北海道がテーマの作品です。

池澤氏は、「物語には常に先行作品があり、小説を書こうとする人はお手本としていろいろな種類のいい作品を自分に合うものが見つかるまでたくさん読むことが大切である」と言っています。

池澤氏の小説や評論は、国語の教科書などに採用されることも多く、「すばらしい新世界」（芸術選奨文部科学大臣賞）、「マシアス・ギリの失脚」（谷崎潤一郎賞）などがあり、2007年紫綬褒章を受章しています。



♪ 福岡アジア美術館「7月の案内」



* アジアの絵本と紙芝居の読み聞かせ

9日(火), 14日(日)

- ・時間: 11:30~12:00, 13:00~13:30
- ・場所: 「キッズコーナー」(7F)
- ・参加費: 無料

「おいでよ!絵本ミュージアム2019」

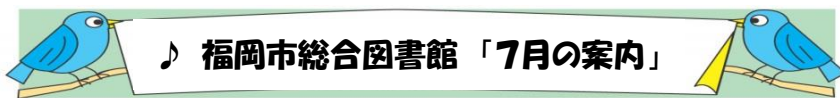
- ・期間: 7月18日(木)~8月18日(日) ※会期中無休
- ・時間: 9:30~17:30 (入場は17:00まで)
- ・観覧料: 一般1000円(800円), 高大生700円(500円), 小中生500円(300円), 未就学児は無料
※()内は前売り, 団体料金
※チケットは当日に限りフリーパス



「おいでよ!絵本ミュージアム2019」

- ・会場: 企画ギャラリー(7F)ほか
- ・内容: 毎年恒例の夏の企画展。子どもたちの感性や想像力・創造力を育むために、1000冊の絵本や原画の展示をはじめ、五感に働きかける多彩な仕掛けやイベント、絵本の世界に入り込めるような空間をプロデュースします。13回目となる今年は、これまで以上に子どもならではの感性の大切さを伝えます。

※「おいでよ!絵本ミュージアム2019」の会期中は、絵本の読み聞かせを毎日開催!
(1日2回 時間: 11:30~, 13:00~)
※会期中の毎週金曜日は、TNCテレビ西日本アナウンサーが読み聞かせを行います。



♪ 福岡市総合図書館「7月の案内」



* 毎月のおはなし会

6日(土), 7日(日), 13日(土), 14日(日)

20日(土), 21日(日), 27日(土), 28日(日)

- ・時間 土曜日: 6日, 13日, 20日
 - 14:10~14:25 0~2歳児とその保護者向けおはなし会
 - 14:30~14:50 幼児向けおはなし会(6日, 13日)
 - 14:30~14:50 幼児~小学生向けおはなし会(20日)
- 27日
 - 14:30~15:00 小学生向けおはなし会
- 日曜日: 7日, 14日, 21日
 - 14:30~15:00 幼児向けおはなし会
 - 15:15~15:45 小学生向けおはなし会
- 28日... 《一日おはなし会》
 - 10:30~15:45 幼児~小学生向けおはなし会

- ・場所: 「こども図書館 おはなしの家」

☆ あとがき

以前、西戸崎小学校の図書館を訪問した時に、子どもたちに図書館の名前の募集をしていました。決まった図書館の名前は、「海中図書館」（うみなかとしょかん）。地域の特色を生かしたぴったりの名前です。図書館の名前を募集することも、子どもたちが図書館に関心を持つきっかけになる取り組みだと思います。

夏休みまで一月ほどになり、学校では、学習参観や学期末懇談会を行ったり、夏休みの本の貸出の準備をしたりする頃だと思います。廊下や階段の踊り場などの通行に支障がない場所に、日頃、手にすることの少ない伝記や科学読み物などのジャンルの本を置き、子どもたちや保護者に、本への関心や魅力を訴えてみてはどうでしょうか。

発行：福岡市教育委員会 生涯学習課

電話：092-711-4655 FAX：092-733-5538

図書館員のひみつの本棚 第158回

自然の素晴らしさを伝えてくれる1冊です。

『センス・オブ・ワンダー』

レイチェル・カーソン／(著) 上遠恵子／訳 新潮文庫 1996年 1400円(税抜)

<お勧め年齢>

乳幼児—— 低学年—— 中学年—— 高学年—— 中学生☆☆☆
高校☆☆☆ — 一般☆☆

(☆が多い年齢の子どもにお勧めです。)

<本の紹介>

「センス・オブ・ワンダー」。この言葉の意味を著者は「神秘さや不思議さに目をみはる感性」と述べています。『沈黙の春』で世界に自然破壊を告発した海洋学者である著者は、もし、妖精と話ができるなら、生涯消えることのない「センス・オブ・ワンダー」を世界中の子どもたちに授けてほしいと願うそうです。人知を超えた地球の美しさと神秘を感じ取れる人は、人生に飽きて疲れることや、孤独にさいなまれることはない、とも述べています。

54ページと短い本ですが、読み終わって本を閉じた時には、忙しさに忙殺される毎日から、目が覚めたように感じる1冊です。

<子どもに手渡す時のポイント>

子どもをもつ大人向けに書かれた文章ですが、センス・オブ・ワンダーを忘れつつある十代の子どもたちにもぜひ読んでもらいたい1冊です。美しい写真が多数掲載されており短い時間で読めるので、朝の読書の時間やすきま時間にぜひ勧めてみてください。

このコーナーで紹介した本はお近くの図書館や書店に置いてあります。ぜひ手にとってみてください。

